

りまして、イロ／＼不思議なことがございます、それにこれをお獲りになりますとは
 どんでもないことをなさいました……」スルト老婆もそれへ出て、老「オヤ／＼、マ
 ア悪いことをなさいます、今にこの狐の子や女房が怒つて祟りをするかもわかりませ
 ん……」と。

親子は狐の死骸をみて打ち惜れました、スルト大久保彦左衛門は、大「コリヤ婆、
 何か狐の祟りでもあるか、婆「ハイ／＼、左様でございます、彦「これは上さまがお
 撃ちあそばし、また一疋の狐は乃公が撃たうとしたが、尻ひが外れて、前足を撃ち逃
 してしまつた、祟りなどある譯のものではない、老「イエ、祟ります、とんだことを
 なさいました……」家康これを聞いて、カラ／＼打ち笑ひ、家「萬物の靈長たるもの
 が、畜生などの祟りをうける氣遣ひはない、左やうな愚にもつかぬことをいふもので
 はないぞ……」いふと老婆は家康の顔をハツタと睨まへ、ヒラリ表へとび出すと何か
 家康の顔へバシーンと投げつけておいて、そのまゝ消へてしまひました、家「ウーム
 不埒な老婆奴……ソレ追かけろ……」いつてゐるうち、伴も何かバラ／＼投げつける

已れ無禮者と大久保彦左衛門、成瀬隼人正が抜刀してギント／＼追つかけたがたちまち
 姿を見失なつた、彦「オヤ／＼、こいつは不思議だ……」と、思つてゐるうち、忽ち
 ちガラ／＼／＼と、凄まじき物音と、もに、小屋は崩れてしまひました、家康主従は
 アツとおどろき、心附いてみると、なんにもないところに立つて居ります、主従は顔
 見合せ、たい／＼不思議におもひ、彦「オヤ／＼、これは上様どうしたのでございま
 せう……」家康公も少々おどろいて、家「どうも不思議だ、彦左、隼人、予は頭が痛
 い、何か婆が予に投げつけたやうであつたが、面部に傷でもできてゐないか、彦「別
 段、御尊体に御別條はございません、家「左様か大分頭が痛い、イヤ妙なこともある
 ものだ……」いふうちに、彦左衛門ブツと吹き出しました、彦「アハ……、成瀬／＼
 なんだいそれは……」

成「これは怪しからん、大勢のうちで乃公の面を指さして笑ふといふは無禮ではない
 か、彦「イヤ、無禮といふが、これが笑はずにをれるか、貴様頭をどうした……」い
 はれて隼人正ヒヨイと頭へ手を當て、見ると、クリ／＼坊主でございませ、成「ウツ

「これは奇体だ……、オ、大久保、貴様面をどうした、彦左、乃公の面……」
 彦左衛門顔を撫で、みると、こはいかに、両方の眉毛が落ちてをります、彦「ウワー
 こいつは妙だ……」見まわすと雑兵にいたるまで、頭の鬘が散亂になつてゐる、家康
 もはじめてそれと気づき、徳「察するところ、老狐を退治たゆゑ、生き残つた奴が業
 をいたすに相違ない、徳「コレ彦左、隼人正、速やかに歸るであらう……」そこで面
 々雪踏みわけ、金剛山をくだつたが、さらに道がわかりません、夜通し歩いてゐるう
 ち、森影より、一人の武士が躍りいで、武「ヤア、大御所家康、汝のきたるを待
 つこと久し、われこそは眞田の郎黨猿飛佐助なり……見参……」おもひがけない
 ことであるから、主従いづれも吃驚仰天。
 徳「ヤ、ツ、さては幸村の手がまわつたか、こいつはたまらぬ……」どん／＼逃げる
 一里ばかりきて、ホツと息をついでゐると、またもや稻村蔭より、武「ヤア、家康
 逃ぐることなかれ、眞田の郎黨霧隠才藏宗連これにあり、見参、大「ウワー、こ
 うにも眞田の伏勢があるか、逃げる……」どん／＼逃げいだしました。

〔三三三〕 佐助大御所の名代米倉和泉守を打取る

斯くのごとく眞田の郎黨に苦しめられたる大御所主従は、方向もわからず夜通し逃
 げて／＼逃げだしやう／＼茶臼山附近へもどつてくると、にわか陣鐘太鼓の音、関
 の聲をあげて武者おし、家康ハツとおどろいて見渡すと、茶臼山本營の周圍には、炎
 々と火が燃ゆあがり、大騒ぎをやつてゐる、大「ヤ、ツ、さては予が留守中に眞田勢
 が城内よりおしよせたものとみへる……」茫然としてゐるところへ、忽ち向ふより
 甲冑武若一騎飛ぶがごとく駆けつけてまいりました、武「おそれながらそれへお越
 遊ばしたるは、上さまにてはございませぬか……」馬から飛び下りハ、ツと平伏する
 大「お、その方は渡邊半藏ではないか、渡「御意にございませぬ、恐れながら上さま
 のお留守中に、眞田の同勢にわか夜討ちをいたし何分不意のことゝて防ぎがたく、
 一刻もはやく上さまの御歸陣ねがはしく、よつてお迎ひに罷りいでましてございませぬ

る、大「ナニ、眞田の同勢が夜討ち、憎き奴じや、ソレ急げ〜……」茶臼山より一町ばかり手前にくると、向ふより六文銭の旗の手懸へし、眞田の同勢が、五六百人凄まじき勢ほひでおしよせてくる、随がふところの大久保、成瀬等の面々、主君の一大事と、大刀抜き放して、眞田の同勢を防いでゐる、ところがにわかには眞田の同勢が崩れ立つたから、どうしたことかと、ヨク〜見ると、背後より眞田勢へ斬り込んだのは秀忠の同勢、サン〜に眞田勢をおひ散らし、父を救つてなんなく本陣へ引あげました。

途端火がバツと消へるとこはいかに、いまで火をもつて圍まれた茶臼山は、なんのかはつたこともなく戦かひのあつた様子もみへませんので、大「オヤ〜、これは不思議」と、ヨク〜調べると、家來や雑兵は大分負傷してをります、これ狐の祟りであらうと大御所も内心ひそかに恐れを抱き、大「イヤ、空元氣をだして餘計なことをするものではない、狐と眞田の忍術つかひのために、とんだ目にあはされた」と、悔んでをりました、ところが關東方もかうたび〜の失敗ではどうも人氣が悪い、勇

氣が挫けて仕方がないから、大御所はおもひきつて、大阪城の攻口を見つもるため、忍びの巡見をすることになりました、随がう旗本勢五千人、すでに出立の用意におよんでゐる、ところがこれを窮がひ知つたのが猿飛佐助でございます、佐助は例の地の底の抜穴から、本陣へ忍び込み、様子を探ると大御所が忍びの巡見をするといふことだから、大いに悦び、どん〜、眞田丸に引き揚げ、幸村に注進いたしました、なんしろ關東の大軍が十重二十重にとりかこんでゐるのだからナカ〜容易に徘徊はできないが、流石は智者の幸村、出丸から大阪城へもチャンと地の底を掘つて、そこから往來のできるやうになつてゐるから、敵に發見される氣遣ひございません、これを聞くに幸村殊の外悦び、幸「面白い、今度は一つ予が自身に打ちむかつて、大御所を討とつてくれん」と、決心して、その夜出丸へ、後藤、長曾我部、その他の勇士豪傑を招き。

幸「かねて大御所には、明日常大阪城の攻口を見つもらんと五千人を随がへ、忍びの巡見といふことを承知いたしました、これこそ天の與へ、今回は身共一人にて大御所を討

ちどらうと心得る、しかし打ち果すことができないときは、トテも無事ではかへることもできないとぞんずる、萬一討死した跡は、御身達において、よろしくたのむ……」スルト後藤は心配して、又「アイヤ軍師、誰か名代をだしてはいかないで……、幸「イヤ、何分高運の大御所公、天の助けがあるゆゑ、とても郎黨や名代ぐらひでは討ちとることかなはず、是非とも拙者がまいるであらう、長「それは、眞田考がへものだ、一人といふは劍呑、なんなら猿飛を召連れたまへ、彼は忍術つかひだから自由自在、大分便利であらうと心得る」

幸「なるほど、しからは佐助一人召つれることにつかまつらう」と、一同をかへした跡、幸村はひそかに佐助を随がへ、出丸を立ちいで、大阪城の水門より小舟にのり、日本堤の方へかゝつてきた、尤も佐助は兵糧、あるひは水の用意をチャンとしてきてをります、幸村は舟を日本堤……いまの道頓堀川のことまでございます、その時分は今日のやうに人家は積んでは居りません、川の兩岸には、葎や葦が澤山おひ茂つてゐる、その間へ小舟をいれ、明け行く空を睨んで待ち受けてゐる、なんしろ十二月の中

旬だ、お負けに川の中だから寒いことこの上もない、佐「お大將、ごうも寒いことでございます、幸「ウム冷へる、その酒でものめ……」主従は寒さ凌ぎに酒をのみ、兵糧を使ひ、待ちかまへてゐる、そんなことは少しも知らない大御所公は、本多佐渡守、本多上野介、安藤帯刀、成瀬隼人、大久保彦左衛門等の面々を随がへ、總勢五千人、いくら忍びの巡見といつたところでこれくらひの人数がをれば目につく、ところが忍びの巡見といふのは、家康公が目印になつて進むのではない、誰か名代を立てるその名代が家康公の身代りとして、大御所そのまゝの風体で馬上にゐる、肝心の家康公は旗本勢の中に交つてゐるやら、雑兵の姿をしてゐるやら、それが敵にはわからんやうにしてある、味方でも重立つものでないと、これが大御所といふことはわからぬいくらひのものでございます、丁度その日の名代は米倉和泉守といふ大器量人で、家康公の甲冑から身のまわり一切をつけて、大御所に成り澄してゐる、肝心の家康は旗本勢の中に交つて知らぬ顔の半兵衛を極めこんでをります、これなら大抵敵に知れる氣遣ひはない。

いましも同勢はしづ／＼進んでくる、幸村は先手の同勢がくるのを見て、幸「巧い佐助拔るな……」と片手に種ヶ島をかへ、火繩をつけて昵と岸に這ひあがり、様子を窺がつてゐたが、なにもおもひけん幸村は、スゴ／＼小舟へもどつてきた、幸「佐助もうかへらう、佐「オヤツ、お大將なせお撃ちに相なりません、幸「イヤ、あれは名代だ、佐「へーん、それがわかりますか、幸「それ位ひがわからんでどうする、あれは大御所とはちがふ、佐「ハ、ン、それでは名代でございますか、幸「さうだ、中途から名代を拵らへたのだ、あの大御所らしい人間からは、さらに光氣が立たぬ、大御所であれば光氣が立つ筈だ、佐「へーん、しかし雑兵か旗本の中に交つてはをりませんか、幸「それはわからん、旗本勢または雑兵の中に混つてをれば、これまた光氣が立ち昇る筈であるがさやうな模様がない、大方光氣を封じてしまつたのかも知れん、佐「へーん、光氣を封じるといひますと、どんなことをいたしますので……、幸「ほかではない大御所が雑兵の甲冑をつけければ、自然封じることになる、佐「ハ、ア、それでは私しがチヨイと調べてまいりませうか」

幸「イヤ／＼、いま調べてもわかるまい、味方ですら知らないやうにしてゐるに違ひない、佐「それでは、このまゝおかへりになりますか、眞「かへるより外に仕方がない、猿「どうも残念でございます、それでは、私が一つあの名代を討ち取つてやりませう、眞「ウム、その方の勝手にいたせ、猿「心得ました」猿飛佐助は種ヶ島を受け取り、葦を押しわけ、十分覗ひ澄して火蓋をきると、ズドーン、狙ひは狂はず、馬上の米倉和泉守、胸板を打ち貫かれて、アツとそのまま、落馬いたしましたので、隨がふ旗本の面々は、○「ソレ曲者だツ」と、大騒ぎに相なりました。

△「ソレツ、曲者はあの葦の中だ、逃すな召捕れい……」五千人の同勢が犇々と取りかこんだからたまりません、佐助は幸村を逃したいとおもふから、佐「御主人、早く、私は例の奥の手で遣つけます、眞「オ、油断すな、先に歸るぞツ……」幸村は小舟を一生懸命に漕ぎたて／＼、日本堤にあがると、ごこともなく逃げ去つてしまつた、跡に佐助はいくら多勢がかこんでも驚ろかない、佐「アハ……、乃公をたゞの人間だと思ふか、サア来い……」

なるべく幸村を逃す考がへだから、佐助は種ヶ島を逆手にもつて、ピュー／＼振り出しました、當つた奴こそ災難だ頭を碎かれ、手足を折られて、バタ／＼打つ倒れた佐助は十分暴れちらし、佐「サア、召捕つてくれ……」種ヶ島を投げ出すとバラ／＼と旗本は折り重なり、△「神妙にしろ……」縛りあげた、□「ヤイ、貴様は何者だ、佐乃公は、眞田の郎黨猿飛佐助だ、△「ナニ、猿飛佐助、サテはたび／＼本陣へ忍びこんでわれ／＼を驚ろかす忍術使ひか、こいつは好いものが手に入つた、貴様獨りではあるまい、他に誰もゐないか、一人逃げた奴があらう……、佐「アハ……、そんなことは聞いただけ野暮だ、ヨシヤ逃げたものがあつても、誰が逃げたといふ氣遣ひはない、餘計なことをたづねるより家康の目通りへ引け、▲「黙れッ、上さまは其方が討ち奉つたではないか、猿「アハ……、それくらひのことが分らぬやうで忍術使ひといはれるか、替へ玉を承知で撃つたのだ、△「エッ、さては……、猿「さてはも糸瓜もない、乃公はチャンと知つてゐる、サア目通りへ引け／＼……」

仕方がないから、大久保彦左衛門が飛びだして来て、彦「ヤイ、貴様が猿飛佐助か

猿「いかにもさうだ、アハ……、金剛山で狐に撫でられて眉毛がなくなつたのは、大久保彦左衛門であつたな……ウム坊主にされたのが成瀬隼人正かアハ……、ヤイ彦左なんじや、彦「こいつ、人を馬鹿にしてゐやアがる、上さまのお目通りに引つ立てる神妙にしろ……」佐助は胸に一物あるから、ごうか大御所が知りたいたいといふ考がへなのでございます、その計畧にかゝつて、彦左衛門は、佐助を目通りへ引立てました、佐助はジツとみると、大御所は雑兵の甲冑をつけて、床机にかゝつて居ります、佐助はこれを見て、猿「ハ、ン、わが君のおつしやつた通りだ、これで光氣がなくなつたのだな、イヤ流石はわが君の御眼力、恐れ入つた……」感心してゐる、ところが大御所はツク／＼佐助の顔を眺めてゐたが、大「コリヤ、其方が猿飛佐助と申す忍術使ひか、猿「如何にも左様でござる、大「余は家康じや、あの馬上の甲冑武士を余とおもつて撃つたであらう」これを聞くと佐助はカラ／＼と冷笑つて、猿「アハ……、それくらひのことが分らないやうで忍術は使はれません、チャンと替へ玉といふことは承知の上でござる、もとより最初は、大御所公とぞんじましたが、ツク／＼天文をみます

るに、一つも光氣が立ち昇つてゐません、よつて替玉と知りました、大「ナニ天文、その方天文を観るか、猿」いかにも天文は主人より教はり、多少は辨まへてをります大「フーム、感心なものだ、シテ逃げた一人は誰じや、猿」主人幸村でござる、徳「フム、幸村がまいつてゐたか、猿」左様、主人は替へ玉ごときを撃つお方ではござらん、それゆゑ某しが撃ちました、サア御存分になさいませ、家「コリヤ、其方ごときを討つたところで戦争に勝つ譯のものではない、どうじや今に大阪は滅びるのだぞ、余に隨身いたさぬか、一萬石を與へるであらう、猿」アハ……、これはお大將のお言葉も覺わしません、私は今眞田家では一合の祿も貰つてはをりません、たゞときた、小使錢をもらひ、酒を飲むばかりがたのしみでござるが、それでも幸村御大將のためには、死を辭せずといふ考がへを持つてをります、これ畢竟利慾に迷はず、主人のために忠義を盡したいといふ考がへがあるのみでござる、二君に仕へるは、われ／＼十勇士の屑よしとせざるところでござる、重ねてお言葉御無用でござる」ボンと跳ねつけました、スルト大久保彦左衛門は怒り出した。

彦「ウーム、こいつ上様のお言葉をなんと心得てゐる、無禮者奴、アイヤ上さま、かやうな横着者はお手討ちこそ然るべくぞんじ奉つります、たゞ、本陣へ入り込み、われ／＼を驚ろかす不敵者、是非ともお手討ちに……」彦左衛門についで、皆のものが口々に述べたてゐるから、家康もその氣になつた、彦左衛門にむかつて、ソレと目配せすると、彦左衛門はガラリ一刀引き抜いた、彦「ヤイ猿飛佐助、覺悟しろ」ヤツと太刀振りかぶつた、猿飛佐助ちつともおどろかない、ニコ／＼笑つて口中に何か稱へてをりますと、やがて彦左衛門エイと一聲打ちおろした、血はサツと迸しつて、首がコロリと前に落ちたとおもひの外、カチーン、刀は眞中からポキンと折れました、彦「ヤ、ツ、こりやどうじや……」ヨク／＼見るとここはいかに、猿飛佐助の姿はいつの間にやら石地藏と代つて居りますから、彦「ヤ、ツ、人間が石地藏になることは……、不思議／＼……」一同もアツとおどろき、四邊キョト／＼見まわしてゐるをりから。

彦「佐助はスツと姿を現はし、猿「ヤア、大御所家康改ためて、猿飛佐助見参仕へ

らん卑怯にも逃げたまふな……」呼ぶ聲もろごも、ズラリ一刀引き抜き、家康望んでサツと斬りこんだ、この體をみると旗本は大いに驚ろき、ワイ／＼騒ぎ立つ、ヤ、ツいつの間に地蔵を掴ませた、サテはまた忍術を行つたとみへる、それツ油断をするな……」四方より無二無三に斬つてかゝりました。

【三四】 關東方は五萬石をかけて幸村の首を求め

大御所は命カラ／＼逃げ出し、佐助は十分暴れちらして、サツと眞田丸へ引き揚げました、家康はやう／＼本陣へ逃げて、歸つたが、大「ごうも、眞田には懲り／＼した、なんとか方法はあるまいか、彼が大阪にあるうちは、トテも豊臣を滅ばすこと思ひもよらぬ……」歎息してゐると、これを聞いた佐渡守は、本「アイヤ上様、斯やう／＼遊ばしてはいかゞでございます」疊の上の孔明と呼ばれた佐渡守が、大御所の耳元で、何かボシヤ／＼囁きました、スルト大御所莞爾として膝を叩き、大「ウム、

よき計略である、その手段を行なへば幸村も承知いたすであらう……」なほも何かヒソ／＼話しあつてゐる、ところが抜らないのは猿飛佐助でございます、眞田丸へ歸ると、すぐに姿をかへて、もう茶臼山へ忍びこんでをります、ところが二人の相談をジツと聞いてゐたが、耳許でボシヤ／＼遣り出したから、薩張分らなくなつた、猿「サア困つた、一體ごういふ計畧だらう、ボシヤ／＼ではわからない、その手段を行なへば幸村も承知をいたすであらうといつたのは聞へたが、その、ちが薩張りわからないいくら乃公が耳敏いといつたところでボシヤ／＼までは聞き取ることができない……マテ／＼一つ乃公の方で計畧を用ひてやらう……」ソツと家康公の背後へまわり、火鉢の火を火箸で摘み、本多の口を持つてくると、ヒヨイと鼻の先へもつて行つた、本「アイタ……ウム、イタイ／＼……」

佐渡守鼻の先を押へて、唾をつけてゐる、大「コリヤ／＼、ごうしたのじや、本「ごうも、御前のお耳は恐ろしい熱い……火のやうでございます、お耳で鼻を焼きました、大「コリヤ／＼、満らないことを申すな、余の耳朶はこの通り冷たいぞ、本「へエー

合點がまいりません、大「それからどういたす、早く次を申せ、本「ハイ實はかやうあそばして……」また口を持つて行く、今度は佐助、家康の耳をグイと抓つた、大「アイタ……、汝は余の耳を噛んだの……アイタ……、とんでもない仇討をいたすものだ、アイタ……」

本「これは合點がまいりません、私しは決して……、大「しかし、この通り耳が……アイタ……、もう耳許で申すな、劍呑でごまる、耳を噛られては大變だ、本「イエ、御前こそ手前の鼻の先をお焼きになつて……、今にヒリ／＼してをります、大「詰らない、余は少しも覺へない、本「私しも噛み申した覺は……、大「それでは耳許へ口をよせないで話せ、怖くなつた」本多佐渡守も仕方がこさいませんから、本「實は幸村の兄伊豆守信幸、叔父隱岐守信尹、御當家に隨身いたしをりますれば、この兩人のうちをもつて幸村を説き、信州一ヶ國を與へると申せば、よもや隨身いたさぬことばござるまいと心得ます、大「然し信州一ヶ國とはあまり大きいではないか、信州松代には眞田伊豆守がある、これが已に十萬石、一ヶ國といへば山國ではあるが一大國

の信州、トテも四十萬石五十萬石ではあるまい、本「なるほど、然らば十萬石と制限をして置けばよろしうございませう、大「フム、十萬石ならよからう、兩人をこれへ呼び出せ、本「畏こまりました……」佐渡守は出軍の供してきてゐる伊豆守と隱岐守を呼び出した、二人は何事やらんと目通りへ出る、スルト家康は、大「ヤヨ兩人、汝等に秘密の大役を申しつける、兩「ハツ、何事にございまする、大「餘の義でもない余は幸村を味方につけたくぞんずる、汝等兩人のうち一人が參つて、斯やう／＼申して説きつけて見よ……」これを聞くと伊豆守信幸は、伊「アイヤ上様、弟幸村はトテも利慾に迷ふ男ではございませぬ、兄の口から申すも異なるものでござるが、斷じて聞き入れません、これは御見合せのほど願はしうぞんじます、大「イヤ、さうでない凡そ人間といふものはいかなる人物でも、名利のために動くものである、幸村が大阪に附いたは、これ取りも直さず、名を得たためである、萬一大阪勝利となり、余が討死でもいたせば天下はふた／＼び豊臣のものとなつて、幸村はさしづめ百萬石以上の大名となることは受合ひ、已に七十萬石とか百萬石とかの墨付を貰つてゐるといふでは

ないか、假令これが偽はりにしたところで、煙りのないところに火はみへぬ譬へ、何か秀頼より左様の話しがあつたものに相違ない、伊「仰せではございますが逆も弟幸村は承知いたすまいかと心得ます」

家「フム、隠岐守どうじや、隠私しは伊豆守とは意見がちがひます、幸村も多年浪々の身の上でござるから十萬石與へるといへば、かならず應ずること、信じます、伊豆ではチトこの使者難かしからうと心得ます、某しがまいりまして、かならず説きつけて御覽に入れます、家「ウム、よく申した、叔父甥の間柄であるから、幸村も承知いたすであらう、萬一説きつけたる曉きは、其方に一萬石の加増である、巧くやれよ、隠ハツ、畏こまりました……」信尹は快よく引受け、伊豆守と、もに、自分の陣屋に歸つた、佐助これを聞くと、猿「オヤツ、乃公の御主人を十萬石で釣らうといふのだな、怪しからん奴だ、御主人は義のために大阪へ入城されたのだ、金を百萬兩積んでも、五百萬石與へるといつても、徳川へ加勢なざる氣遣ひはないのだ、こいつイヨ／＼窮してきたと見へる……」佐助行きがけの駄賃に背後より猿臂を伸し、大

御所と佐渡守の鬚をチョイ、カチーン、鉢合せさせておいて、バツと飛び出しました跡に主従兩人はアツと驚ろいて、徳「ウム、痛いな佐渡……」本「上さま、御冗戯をあそばしては困ります、徳「イヤ、予は知らんぞ、本「手前も、一向ぞんじません……ハテナ……」大きな瘤を擦で、澁面作つてをります、佐助はドシ／＼出丸へ戻つてくると、猿「御主人、斯やう／＼でございます、眞「アハ……それは昨夜から知つてゐる、昨夜天文を觀しに、遊星がこの出丸に落ちた、よつて何か茶臼山から申しまいるに相違ないと心得てゐた、さては余を隨身させん考がへであるかツ、アハ……假令叔父上たりとも、ヤワか聞きこける幸村でない、コリヤ佐助、今に叔父上がみへるであらう、十勇士をこれへ居列ばせ、斯やう／＼にいたしをれ、猿「ハツ、畏こまりました……」

佐助は十勇士を呼び出しました、幸村は一同にむかひ、三「好清海入道はじめ一同のもの、たゞいま叔父の信尹が大御所内密の使者としてまゐられる筈である、其方等はこゝに居列んで目を剝いてをれ、十「ハイ、目を剝いてをれば宜しいのでございま

すか、眞ウム、それで好い、三三チト、拳骨を鼻の先で捻くり廻してはいけませんか、眞ウム、それくらひは構はない、しかし予のためには血肉を分けた叔父である決して手出しはならんぞ、由エ、御大將にうかひます、眞鎌之助か、なんじや由首筋掴んでコツキ廻すくらひは差支へございませぬ、眞左様なことをしては困る、成べく威かすばかりにいたせ、手出しは断じてならぬ……」十勇士は顔見合せて頭を掻いてをります。

そんなこと、は少しも知らず、此方叔父の眞田隠岐守はたゞ獨り供をもつれず、潜行の姿で眞田丸へ訪ねて來ました、巳に番兵に命じてございませぬから、快よく通しました、隠岐守は幸村の居室へ導びかれた、たがひに無沙汰の挨拶を述べた、この時隠岐は、隠幸村、内々に申し入れたいことがある、人拂ひに及んではくれまいか」スルト幸村は、眞アイヤ叔父上、この十勇士はいづれも股肱の郎黨でござる、少しも差支へござらぬ、秘密をお話しに相成りましても口外するやうな人物は一人もござらん、まつた私しが承まはりましたところで、矢張りこの者等に相談に及んで御返答を

せんければ相成りませぬから、何卒お心置なくお話しくださいさるやう」と、いはれまして、隠岐はヒヨイと見ると、十勇士はいづれも肩胛張つて、眼を斜いて控へて居ります、中には拳骨を捻くり廻してゐるものもある、素破といは、飛びかゝりさうな権幕である、ハツと驚ろいた隠岐ブル／＼と身慄ひした、三三エツヘーン、どうもこの腕が夜泣をして困る、ヤイ弟、頭を出せ、一つ殿つてやらう……」伊三入道スツと頭を出す、清海入道ブツと拳骨に濕りをくれて、ポカーン、伊ウーム、兄上痛くはござらんぞ、ウーム」

由ヤア、面白いことをやるな、乃公は夜泣きじやアない、この節は晝泣きをして困る、乃公も一番殿らせろ……」ポカーン、これをみて隠岐ます／＼慄へ上つてをります、眞コリヤ／＼、静かにいたせ、叔父上に失禮ではないか、シテ叔父上御用の趣むきは……、隠餘の義ではないが、大御所公が斯やう／＼仰せられる、もし大阪を退散して味方へまいつたならば、信州で十萬石取らせやうとのこと、其方の兄信幸は徳川家に隨身して、立派な身の上、兄弟が敵味方となつて、東西に別れてゐるは甚だ

心ぐるしい次第、乃公とてもよゝ氣持はしない、何んと徳川へ隨身して、親戚兄弟心を合せて、大御所公を助ける氣はないか……」と、辯にまかせて説きつけました、これを聞く幸村莞爾として、眞叔父上、御厚意の段は忝けなうお禮申しあげまするしかし私しは父上と、もに關ヶ原の戦には石田方となり、それがため大御所の怒りに觸れ、罪科を蒙むつて九度山へ蟄居の身の上、百姓となり下つてゐたのを、秀頼公から召出されて、たゞいまでは一廉の大將となり、軍師を承まはつてゐる次第、折角ながらお断わり申す』といつた、スルト、隠岐は重ねて、隠それでは幸村、信州一ヶ國を平均して取らせると仰せあれば、お受けするかどうじや……」これを聞くと幸村大いに怒り。

眞叔父上、この左衛門尉をなんと見られたか、忠義に二つはござらぬ、祿の多少によつて志しを變ずる如き犬侍ではござらん、一旦秀頼公の扶持を受けた以上は、飽までも討死の覺悟でござる、然し和談ともなれば、ふたゝび九度山に隠れるまでのこと亂世にあれ治世にあれ、祿に望みを持つ幸村ではござらぬ……」と、大氣胸を吐いて

それと十勇士に目配せすると、待ち構へた十勇士は、得たりやオーと突つ立ち上り、三三イザ、隠岐守様お送り申しませうぐすく遊ばすと物騒でござる』手取り足取り引擔ぎエツシヨ〜』と門前へ連れ出し、そつと投げ出し、『三エツへ……物騒でござるぞ、お早くお歸りあそばせ、重ねてお越しは御無用〜……』鼻の先で拳骨を捻くり廻されて、隠岐守は氣味の悪いこと夥だしい、這々の体で逃ぐるがごとく立ち歸つてしまひました、三三アハ……、面白〜、これが御大將の叔父御でなかつたら最少し酷い目に遭してやるのだが、残念なことだ……』十勇士は大笑ひ、然るに隠岐守は悄悄茶白山に立ち歸り、此のことを大御所家康公に言上すると、家康これを聞いて大いに怒り。

家憎くき幸村奴、ヤア〜者共、萬一幸村の首を得るものがあらば、五萬石に取り立てる、望みのものはもうし出でよ』と、諸軍に觸れを出しました、五萬石の懸賞は恐らく前代末聞でございます、ところがこれも首尾よく失敗にをはりましたので、大御所公もモウ手のつけやうがございませぬそこで大御所公は何時まで睨み合つてゐ

ても、際限がございませぬから、大御所家康公は、全軍に總攻撃せよと命じました、早くもこのことが城内に聞ゆる、スルト例の薄田隼人、一時大野に瞞着されてゐる、不人氣になつたから、これを取り返へすは今日にありと、自から眞田丸へ歩つて来て兼「アイヤ軍師、今回大御所が總攻撃を命じたとやら、是非とも某しに一方の大將を勤めるやう相願ひたい、眞「承知いたした……」幸村はチャンと軍議評定に及んで薄田隼人を伯樂ヶ淵の方面へ差し向けました、ところがこの方面には、蜂須賀勢が穢多ヶ崎を乗取ることにして、犇々つめかけて居ります、イヨ／＼戦ひが始まると、薄田隼人兼相は眞先に乗り出し、徳川の大將松平勘十郎を打ち取り、非常なる大功を立て一旦取られた穢多ヶ崎を取り返しました、これがため薄田隼人の汚名は取り返し、以前のごとく城内一の人氣者となつた、大御所はまたも戦ひは敗北だから茶臼山の本陣に引籠り、頭痛鉢巻の体でございませぬ、ところが幸村、密かに織田有樂齋の伴丹後を呼出し、これを自分の影武者に仕立てさせ、信雄入道の伴兵部大輔を呼出し、これを伴大助の影武者として、十勇士を呼出し、眞「其方等は、一闘乃公の影武者だ、今

夜茶臼山の本陣へ斬り込め……」スルト三好清海入道は進み出で、三「御大將、私しはごうも御大將の影武者は困ります、この通り坊主でございませぬから、眞「それでは張子の鬚を拵らへたら好からう……」清海入道鬚をポツ／＼拵らへ、三「ヤア、出来た／＼、これで坊主とは見ぬ、弟貴様もこの通りにしろ」兄弟が張子の鬚を被つて大威張り、夜に入ると猿飛佐助の案内で、ゾロ／＼出かけ、不意に茶臼山の本陣へ攻めかゝり、△「ヤア／＼眞田幸村これにあり、大御所公見参／＼、□「ヤア／＼、眞田大助これにあり、大御所公見参／＼……」十勇士も口々に呼び立て／＼、無二無三に斬りこみました、大御所家康これを聞いて吃驚仰天、家「ヤツ、大變だ、また幸村が攻め込んだぞ、ソレ防げ／＼……」

本陣は上を下への大騒動となつた、十勇士の面々はおもう存分敵を惱まし、サツと引あげる、翌晩もまた出掛ける、毎晩／＼夜襲に乗り込むから、徳川方は碌々夜も寝られず、疲れ切つて、フナ／＼になつて居ります、こちらは毎晩攻めかゝては、サツと引あげ、グウ／＼寝るのだから、勇氣は少しも挫けませぬ、これには家康も弱つた

家「ごうも、真田の十勇士は無法者ばかりだ、バツバと出て、バツバと消れる、宛で稲妻のやうだ」と、舌を捲いて驚ろいて居ります、然るに一日幸村、大阪城内へ出仕するに、大野道大齋は幸村に向ひ、犬「時に真田軍師、一つお尋ね申すが、出丸では只一度合戦があつたばかりで、その後は一つも合戦がござらぬが、之れは如何でござる」

真「左様關東方大軍なりと雖も、我が出丸を恐れ攻めかゝりません、併し近日關東の大軍を出丸へ引よせ、打ち破つて御覽に入れませう、道「成程、それは面白からう、その時は拜見したいものでござる」スルト淀君も、淀「アイヤ、軍師、妾も見たく存する、真「いづれはそのうちに御沙汰仕つるでござらう……」出丸へ引取つた、その夜幸村、天文を見ると、陰氣濛々と立ち上り、盛んに陽氣を打つやうであるから幸村は莞爾として、使者を大阪城内へおくり、真「明日早天に、小敵を撃つて御覽にいきますからなにとぞ御見物ありたし」と、申し送りしました、淀君はじめ織田、大野の面々、翌早朝になると、出丸へやつて來た、ところがこの真田丸は南にむかつて張

り出してございます、その前面には、關東の同勢およそ二三十頭の大名、嚴重に備へを立てゝある、殊に真正面は加賀の勢だ、この手の先陣は奥村攝津守といつて、加賀の豪傑だ、五千の同勢を隨へ、出丸の前に備へてゐる、時刻がくると、奥村勢は、ごつと繰り出し、出丸にむかつて戦ひを挑んだ、真田は十勇士を呼び出し、何か命ずると、十勇士の面々は躍りあがり、各自に六文錢の旗を翻へし、馬に跨がり、ごつと奥村勢に斬りこんだ、タツタ十人だが、猿飛佐助と霧隠才藏とが、忍術を使つてゐるから、五六千の同勢のやうにみへる、忽ち奥村勢は打ち破られた、ところが茶臼山の本陣より本日の合戦一先づ中止せよとの命が來た、幸村は早くもそれと知り、真「佐助、斯やうくにいたせ」

佐「心得ました……」佐助は大きい立札を拵らへさせ、それへ持つていつて。
東武者破れ車の如くにて

乗るに乘られず引くに引かれず
かう書いて建てました、關東三十頭の大名はこの高札をみて怒つたの怒らないのじ

やアない、就中前田加賀守利長は氣早の大將であるから、前「己れ惜くき幸村の振舞
飽までこの出丸を予が手に乗つとつてくれん」と、大御所にねがひを出しました、す
ると大御所ごうしても許さない、越前宰相も一手で出丸を攻めたいとねがひ出ました
仙臺家も願ひでる、家康も一々跳ねつけることはできないから、承知の旨を答へた、
第一番手が加州、二番手が藤堂、淺野、三番手が加藤肥後守、四番手が井伊、酒井、五番
手が伊達政宗、六番手が立花、七番手が松倉豊後守、八番手が金森出雲守と、ダン／＼三十頭
が二十二番まで定まりました、これを十千十二支の備へといつて、これが破れるとき
は、入り替り立ち替り後陣とつめかへることになつて少しも休みなく攻めたてる、所
謂これが番手攻めといふのでございます、こり軍備がなり立つと、間者は立ちかへつ
て、このことを幸村に告げました。

眞「面白いイヨ／＼關東の大軍を敗る時節が到來した、イヨ／＼幸村の價値をみせて
くれん」とたゞちに城内へ使者を立て、眞「明日、斯やう／＼でござるから、是非御
上覽くださるやう……」と、申しおくれた、淀君はじめ一同は、眞田丸へ繰り出して

きました。

〔三五〕 十勇士和睦勸告使を途中甚い目に會す

幸村の案内で一同は櫓に出てみますると、關東方の諸大名、定紋ついた旗馬印を風
に飄がへし、意氣揚々として備へを立て、をります、秀秀公はこれまで城内より滅多
に出たことがございせんからこんなありさまを見ると、物珍らしい、流石は太閤殿
下の血をうけた若大將、平氣で見渡してゐたが、敵軍をみると、先陣に小勢でもつて
六文錢の旗の手を立て、ゐるものがある、秀頼公これを見ると、秀「幸村／＼、あれ
は何人である、眞「ハイ、あれこそは手前の兄眞田伊豆守信幸の伴河内守信吉、同じ
く弟外記信政、兄弟のものとおもはれます、秀「フム、そうかすると其方の甥ではな
いか、眞「御意にございます、大義親を滅す、親兄弟と雖ども、戰場においては敵味
方、かならず血祭りに討取つて御覽に入れたてまつります、秀「アコリヤ／＼決して

ならぬ、其方の一族とあらば、鐵砲を撃つことはならぬ、其方の部下一同へこの由傳へよ……」幸村感涙に咽び、有がたく禮をのべました、然るにこなた家康も、生玉まで出馬、馬場先に組みあげてある櫓にのぼり、小手を翳してみてあると、十千十二支の備へ、二十二段といふものは、いかにも勇氣凛々としてゐる、ところが少し離れたところに小勢で備へを立てゝゐるものがある、家康これを怪しみ、眞「ア、こりや、彼の小勢は何者じや、予には旗の手がたしかに分らぬ、口「ハイ、あれは眞田兄弟にございまする」

家「ナニ、眞田兄弟、今日の番手攻めは、彼等には申しつけぬ筈である、怪しからんことじや、急ぎ彼等兄弟を呼よせよ……」使者が立ちますると、早速兄弟は出てきた徳「兩人、今日の番手攻めは、汝等兄弟には申しつけぬはずであるが、なせ出陣におよんだ、河「恐れながら叔父幸村、關ヶ原合戦のとき、主君に御敵對仕つり、數度の無禮におよび候へども、わが父伊豆守が命乞ひによつて、御赦免下しおかれ、謹しんで御恩を思ひ閑居仕つるべきはずなるに、この度大阪へ入城、たび／＼狼籍の振舞あ

り、言語道斷、よつてわれ／＼はお許しなしといへども、父の遺言により、君の仇ごぞんじ、今日の合戦に一番手に進み、叔父ながらも幸村を討つて取り、無念を晴さん存念にございまする、徳「フーム、さうか、若年ながら誠忠の至り、しかし余は幸村を憎まぬぞ、敵ながら天晴な豪勇と感服してゐる、其方もその積りであるがよい、苦しうない引き取れ……」眞田兄弟は元の陣所へ引き揚げました、イヨ／＼時刻が移りますと、第一番に前田家が攻めかゝつた、幸村は莞爾として、眞「太閤の恩を忘れし前田加賀守、微塵に踏み砕け……」下知に應じて出丸よりはごん／＼鐵砲を打ち出す十勇士はわれ一に、躍り出た、中にも猿飛佐助は忍術といふ得物があるから、バツと姿を隠して、大將前田加賀守に近か寄り、馬の下腹に飛び込み、人馬もろとも引抱へ投げ出す、大將がこんな負け方だから、みる／＼前田勢は總崩れとなつた、入り替つて二番手藤堂淺野の同勢が三萬餘騎、雲霞のごとく攻めかゝる、これは眼潰しの計畧で、滅茶／＼にしてしまつた、三番手の加藤肥後守も無殘にやられた、四番の井伊、酒井も汚なく總敗軍となると、大御所氣を煮ち、總が／＼といふ命をくだし、二十二

段の備へが、無二無三に攻めかゝつた、この体をみると、幸村はひそかに猿飛佐助と霧隠才藏を招き、何か命じた、二人はたゞちにバツと姿を隠しました、姿を隠してどこへ行つたかといふと、二人は幸村の拵らへた張抜の大筒を一挺づゝ引かゝへ、例の抜道より地中を潜り、月光寺といふ寺の藪中に抜道を拵らへてあるから、これへ抜いで、大御所が生魂の馬場先櫓の上で一心に見てゐる奴を、その後手にまわりまして北向八幡の森の中へ乗りこんで来た、二人はたがひに示し合せ、佐「抜かるな霧隠、乃公がやり損じたら、貴様がすぐに二の手をやれ、悪運強き大御所だから、少しも油断はならぬ」

才「おゝ合點だ……」猿飛佐助は十分狙ひをつけ、ヤツと火蓋をきつて放した、ズトーン、萬雷一時に落ちかゝるごときありさま、黒煙濛々としてたちのぼつたが、猿飛佐助なに思ひけん、佐「アツ、失策つた、遣り損じたぞツ……」いつてゐるうちに、櫓は忽ち微塵となり、大御所はじめ旗本の面々、アツといふ間もなく真逆様に轉がりおち、家康は氣絶したといふ騒ぎ、霧隠才藏第二の火蓋を切らうとしたが、家康が

轉がり落ちたから見當がつかない、才「こいつは困つた、猿飛……」みると最う猿飛の姿はみへない、才藏仕方がないから、第二の火蓋を切つた、ズトーン、四邊一面は骨灰微塵となりました、ところが大久保彦左衛門、黒煙の中を四ツ這ひに這つてやう／＼氣絶してゐる家康の側へきた、肩に引擔いで茶臼山の方へ命からん／＼逃げ出した、佐助は飽まで遣ツつけんと、姿を隠して追かけたが、家康の周圍には、安藤、成瀬等の豪傑が守護してゐるからどうしても近よることが出来ません、茶臼山の本陣手前になると、佐助は先まわりして待ち構へ、今しも大久保等が逃げてくるころをバラリ飛び出し、バツと立ち塞がり、佐「ヤア／＼大御所逃ぐるとは卑怯であらう、眞田の郎黨猿飛佐助これにあり、見参／＼」

大「や、ツ、出たぞ／＼、それ防げ／＼……」彦左衛門横手へズン／＼逃げ出す、するともた行手にヌツと立ちあらはれた一人はこれぞ霧隠才藏でございます、才「大御所逃ぐるご勿れ、首を渡せ、眞田の郎黨霧隠才藏これにあり、見参／＼、大「ウツ、こいつは大變だ忍術家にかゝつては敵はない、逃げろ／＼……」安藤、成瀬が防

ぎ戦つてゐる間に、ごしく逃げ出し、とうとう茶臼山の本陣へ逃げこんだ、猿飛、霧隠の兩人はガツカリして、才「残念く、また取り逃したか、残念く……」二人は仕方がないから、ごしく出丸へ戻つてくる、ところが幸村は、一心に生魂の方面を見つめてゐたが、茶臼山の方に當つて、光氣が柳引いてゐるから、眞「ア、失策つた、猿飛、霧隠が遣り損じたごみへる、惜しいことをしたものだ」と、切齒をしるる、ごころへ兩人は戻つてきた、具さに様子を聞いて、眞「ごうも、幸運の大御所である」と、

歎息して居りました、然るにこなた關東の大軍は、いかに精銳を盡して攻めかゝつても、眞田丸は怯ごもいたしません、たゞ味方の兵を損するばかりであるから、いづれも舌をまいて、幸村の軍器に感服いたし、就中家康公は幸村と聞いても身慄ひする家「ぶるく、天下に恐るべきは幸村あるのみだ、それに十勇士といふ奴がまた怖い中にも猿飛佐助、霧隠才藏ごかいふ忍術使ひには慄々した……」慄ひあがつて恐れて居ります、ごころがごのことが天聽に達し、勅使大納言藤原兼勝が、茶臼山の陣に下

つて、密旨を傳へ、よろしく講和せよとの旨を諭された、すると毫猶なる家康はこれを辭退いたしました、ごうが家康の横着なごころで、一旦講和はする考がへであつたのだが、徳「ごうも、恐れ多くも勅使を煩らはしてまでも講和はできぬ、自分の考がへは大阪を亡ぼし、子孫に憂ひを残さないやうにといふ目的だ、然るにこの際、勅命によつて講和をすると、萬一後日その約束に背くときは違勅の罪は輕からぬ、天下の大名に信用を失なうことになる、それを小楯に取つて攻められるご、こちらが大分危ふくなる、これは一つ御辭退申すにかざる」と、横着な考がへを起し、上の密旨に對じては辭し奉つておいて、勅使大納言藤原兼勝を返した上、徳「お茶の局を召せ」たいちにお茶の局は目通りへ出た、局「御用にございますか、徳「其方これより、京都へまいり常光院を迎へてこい……」常光院とは淀君の妹でございます、この手から淀君へまづ講和を持ち込むつもりなのでございます、ごころか、幸村或る夜天文を見てゐたが、ハツと驚ろいた体にて。

幸「ヤ、ツ、これは大變、かならず大御所和談を申しこむに相違ない、コリヤ佐助、

早くまわれ……」佐助は目通りにでた、佐「御用でございますか、幸「オ、佐助、其方これより茶白山に忍びこみ、斯やうくと心得るから、詳しく探つてまわれ……、佐「心得ました……」佐助は身仕度して出丸を飛びだすとバツと消へた、ノシノシ茶白山の本陣へ入りこんでみると、勅使大納言藤原兼勝卿が密旨を以つて講和せよと悟されたこと、家康が辭退した、お茶の局をもつて、常光院を迎へさせたことまでがことごとく分りました、佐助は急ぎ立ち歸つて、このことを幸村に告げますと、幸村はアツと驚ろいた、眞「フ、ム、大御所といふ大將はごこまでも用心深いから、常光院を京都へ迎へにやつた以上は、必らず常光院の手から、淀君を動かす積りに相違ない、今和談させては一大事である、大御所の和談は、眞實の和談にあらずして、偽わりの和睦といふことは火を見るよりも明らかである、コレ佐助、其方三好清海入道、寛十造と共に、常光院を途中に要して、大阪へまゐらせぬことにいたせ、佐「ハイ、それでは一思ひに……、眞「イヤ、殺しては悪い、決して殺なす、追ひ散してしまへ」

佐助は三好清海入道と、寛十造を呼んできた、三「ナンダ、暴れる仕事が出来たのか、佐「ヤア騒ぐな、御大將に聞け」清海入道と十造は幸村の目通りに入る、三「ハイ、御用でございますか、幸「清海入道と十造、其方兩人は十勇士中での暴れ者であるから一つ仕事を申しつける、三「ヤアこれはありがたう存じます、茶白山へ乗りこみまして、大御所の素ツ首をさげて歸るのでござるか……、左「コリヤ、そんなことが出来る譯のものではない、實は斯やうとである、佐助と共に參つて途中で追ひ散らせ、大阪城へ入れなければそれでよいのである、十「ハツ、かしこまりました、婦女とは少々不足でござるが、一番遣付けて御覽にいれます……」二人は雀躍りして喜び、翌朝はやく出丸を立ち出で、三人はノシノシ茶白山の中間へ出てきて、物蔭に隠れてゐると、しばらく經つて向ふより、婦乗物が來ました、佐「オイ三好、寛、アレだよ……」

三「ウム、乃公と十造とが、供の奴を追ひ散らす、貴様は常光院をやれ、佐「オ、合點だ……」三人はバラリ飛び出し、乗物の行手に立ち塞がる、スルト先供は怒つて、

怒鳴りたてる、三人は怯ともいたしませぬ、佐「喧ましいわい、貴様等の知つたことではない、其處のけ……」佐助はバツと消れたとおもふと、もう駕籠の側に進んでゐる、棒鼻掴んでウンと突く、駕夫は驚ろいた、口「ウーム此奴狼藉者……」供人は吃驚仰天、ワイ／＼騒ぎ立つ奴、清海入道と十造は、三「エ、イ、貴様等は此方へ来い……」

拳骨固めてボカ／＼打ン殴る、取つて投る、なんしろ婦女の供揃ひだから十二三人よりしかない、十「三好、こんな奴は踏み潰してしまへ……」亂暴者同志だからたまらない、侍女等は摘んでホイ／＼痛くないやうに投る、男の供はボカ／＼殴り据わる見る／＼十二三人は氣絶する逃げる、片付くことのはやいこと、その間に佐助は駕籠屋を殴りつけ、籠籠を引擔ぐがはやいか、ドシ／＼駈け出した、乗つてゐる常光院はアツと驚ろいた、常「狼藉者……無禮者……曲者……」いくら叫んでも平氣だ、佐「糞でも喰へ、貴様には用があるのだ……」ドシ／＼駈け出し、茶臼山の裏手に來ると、一つの池がある、池の中へドブーン、亂暴なことをやるものだ、佐助は投りこ

んでをいて、ドシ／＼元のところへ取つて返へし、佐「サア、三好、寛歸らう／＼」佐助は忍術でバツと消れた、ところが清海入道と、十造は消れる譯にゆきませんからノシ／＼その場を立つて、大威張りで一二丁來ると、はやこのことを茶臼山へ注進したとみへ、二三百人はワア／＼関を揚げて追かけてくる、これを見ると清海入道と十造は、十「オヤツ、大分面白くなつてきたぞ、三好序でに此奴等相手に一番暴れてやらうか」

三「オ、よからう／＼、遣付けろ……」二人は立ち止まつてゐるところへドツと乗りこんできた、口「ヤア曲者、繩にかゝれ……、三「アハ……、曲者とはなんだ、乃公は立派な主人持ちだぞ、眞田十勇士の随一人、三好清海入道を知らんか、十「大方無双の寛十造とは乃公のことだ、一人二人は面倒だ、束になつて一度にかゝれ……」大言を拂つて大手を擴げた、口「オヤツ、こいつ太い野郎だ、ソレ遣付けろ……」四方より無二無三に打つてかゝる、三「エ、イ蛆虫騒ぐな……」拳骨をブーンと振ると一度に五人十人、バタ／＼と將棋倒しの有様でございました。

【三六】 猿飛寛の兩人敵の大砲を分捕つて暴れ廻る

常光院はズブ濡れになつて、茶臼山に引取られた、水を呑んだので、半死半生でございませぬ、大病人のごとく、ウム／＼唸いてナカ／＼頭があたりませぬ、家康は大心配、いろ／＼手當てを加へました、これがため大阪城内へ出かけることは日延べとなつた、幸村は大いに喜び、左「アハ……、まづこれで當分安心だ、しかし大御所のことだから、決して中止はしないであらう……」尙も抜りなく様子を窺がつてゐる、その間には幸村、佐助等に命じて、しきりに關東の陣屋を脅やかす、大御所はすでに講和と覺悟を極めてゐるのであるから、全軍に令を下だしすこしも出で、戦かふことをしませぬ、十勇士は無闇に誘きだそうとする、そう斯うするうち常光院は全快いたしました、今度は萬一を慮はかつて、警固の武士五十人ばかりをつけた、ところが幸村はやくもこのことを知り、またもや猿飛佐助と由利鎌之助、穴山小助、寛十造の四

人に命じた、四人は途中に要撃して、さん／＼の目に遭し、また常光院は池の中へ投りこまれて、半死半生、また日延べとなりました、全快する、今度は百人以上の人数をつげやうとすると、本多佐渡守はこれをどめ、本「上様、内密に城内へまゐるものに百人以上の人数は大仰にございませう、この上は夜中密にお遣はしに相なるがよろしからうとぞんじまするそれについて城内へ直にまゐりましては、またいかなる妨害におよばんも計りがたし、よつて大野治長の屋敷までまゐるが第一の手段でございませう」

家康ハタと膝を叩き、徳「ウム、好いところへ氣がついた、しからばそういふことにいたそう」密かに常光院を駕籠にのせ大野の屋敷へ送りつけました、これには幸村も閉口いたし、左「この上は仕方がない、講和評定の席で議論するより外に仕方がない」と、歎息してをりました、こなた常光院は大野の手よりやう／＼城内へ入りこみ姉淀君に會つて、大御所よりの講和を申しこんだ、これを聞くと大野等は力味だして「治」エツへ……、なんのことだ、二十萬の兵を大阪まで送りだして、まだ大した軍も

しないで、講和は申しこむとはあまりとしても、意氣地がないではないか……」自然と天狗になる、ところが幸村等は考がへが違ひ、左「ごうも、今度の講和は油断がなぬ、常光院は辯にまかせて姉を説きました、淀君はこれを聞いてたゞちに即答はできないから、まづ侍女をつれて城内を巡視して、天主閣へ登つてきた、ところが東方には、旗さしものが天に沖して、ヒラ／＼と飄がへるありさま、城外一面の地、皆關東の兵を以つて充滿てゐるから、流石婦女の身ではこれを見ては駭ろかすにはゐられない、ところが兼て大御所の命を受けて備前島に大砲据わてゐる、菅沼正秀が、火蓋を切つて、轟然一發放したから堪りませぬ、彈丸は天主閣の二層目に當つて、侍女二名が粉になつて飛んだ、この慘劇を目の邊り見た淀君は、もう青くなつてしまひ、不意に講和をする氣になりました、天主閣を下りるが早々、秀頼に向つて講和を勧めた、ところが怒つたのは幸村でございます、左「佐助／＼、大御所が命じたのには相違ないが、備前島の菅沼正秀は不埒千萬である、講和を申し込んでおきながら、淀君の巡

視をいつ知つたか、大砲で威かすとは不埒至極、汝早々、乗り込んで、大砲を奪つて歸れ、佐「ハッ、畏こまりました、左「奪つて歸ることが出来なければ、大砲を役に立たぬやうにいたしてしまへ……」佐助は一人ではいけないと思ひましたから力強よの寛十造にこのことを話して同道することになつた、二人は夜にいとドシ／＼出掛ける先づ佐助が忍術で敵の様子を窺がふと、敵陣も安心して寝入り鼻だ、佐「オイ寛ヨク寝てゐるよ、大砲は正面に二門据わてゐる、十「ウム、そうか一つ擔いで歸らうか」

佐「よからう、十「しかしその前に暴れてもよいだらう、佐「いかん／＼、御大將の仰しやつたのは、暴れることはするな、大砲さへ分捕れば好いこの仰せであつたぞ、十「ウム、チヨイと内處で暴れる分には……、佐「オイ／＼、内處でもわかるよ、つまらない虻蜂取らずになつたらごうする、十「ウム、そこもある、しかし暴れたいなア……」十造腕をムヅ／＼させながら、ノシ／＼奥へ入り込む、番兵などは酒でも飲んで居汚なくグウ／＼寝こんでをります、二人は一挺づゝ大砲に手をかけた、ウン

と引揚げ、なんなく擔いだ、佐助は先に立つてノシ／＼立ち上る、十造後に續いてゐたが、十「待て／＼、猿飛は暴れやうといつてもナカ／＼正直者だから、聞かない、一つ悪戯をしてやらう……」大力無双だから、重い大砲を両手に掴んで突き出した、丁度棒でも突き出してゐるやうだ、番兵の鼻の先へヌツと突き出し、十「ヤイ／＼、起きろ／＼番兵……」呼び立てられて番兵はヒヨイと目を覺す、アツと驚ろき、平倒り込みキヤツ、そのまゝ氣絶した、これが面白いから、また次の奴の鼻の先を突く、アツと驚ろき、キヤツと目を眩す、十「アハ……、面白い／＼……」十造調子に乗つて、陣屋の門を出ながら、ビューと大砲を振りまわすと、番小屋に當つてバリ／＼、メリ／＼、番小屋は滅茶／＼になりました、その物音に目を覺した一同のものは、△「ナンダ／＼、恐ろしい物音がしたではないか、□「大方地震であらう、○「イ、ヤ、地震とは違ふやうだ……」

飛び出してみると、曲者が大砲奪つて立ち去る様子でありますから、△「ヤ、ツ、曲者ツ……」ツイ／＼飛び出し大騒ぎとなつて、十造は大勢の奴に取り囲まれたが佐

ごもいたしませぬ、十「ヤア、思惑通りなつて来たぞ、猿飛はあないな、ヨ、シ、一番暴れ散して逃げ出してやらう……」ビュー／＼大砲を振り廻はす、これに當つて、五人七人バタ／＼倒れる、見る／＼四五十人はその場に平倒り込みました、この時大將菅沼正秀は、陣屋に曲者入りこんだと聞いて大いに駭ろき、甲冑に身を固め、飛び出してみるごこのありさまでございませぬから、正秀大いに怒り、正「ヤア、大砲を盗んで行くとは不敵の曲者である、ソレ召捕れい……」聲に應じてバラ／＼飛びかゝりました、十造は少しも驚ろきませぬ、十「面白／＼、大將がボツ／＼飛んで出たなヨシ、一番腕前を見せてやらう……」

四角八面に暴れ出しました、ビュー／＼大砲を振りまわす、イヤ驚ろいたのは菅沼正秀でございませぬ、正「オヤ／＼、恐ろしい奴だ、ソレ飛道具／＼……」聲に應じて鐵砲組が二三百人飛び出して来た、これには向ふ見すの十造も弱りました、十「ウム残念、調子に乗り過ぎて飛んだ目に遭つた、オーイ猿飛はごこへ行つた、猿飛／＼」猿飛佐助、二二三丁駆け出したが、一向十造が戻つて来ないから、猿「ハ、ン、寛奴は

何か事件を起したな、仕方のない奴だ……」待つてゐるがナカ／＼みへない、そのうちにおイ／＼猿飛／＼といふ聲が聞えまするので、佐助は、猿「フーム、イヨ／＼やつてるな、こいつは捨て置けない……」バラ／＼引返してみると、十造は鐵砲組に取り圍まれて、大回みの躰でございますから、猿「アハ……向ふ見すの奴も大分弱つてるな、ヨシ……このまゝ捨ておいては大變だ……」佐助は大砲傍へに投げ出したと思ふと、バツと姿を隠しました、鐵砲組の火繩を一々揉み消すその早さ、△「オヤツ、乃公は火繩が消へた、ハテナ……」ワイ／＼騒ぎははじめました、この体を見ると、十造は早くもそれと知り。

十「ありがたい、猿飛が来てくれたな、面白い／＼……」面も振らす多勢の真只中に飛びこみ、大砲をビュー／＼振りまわす、バタ／＼倒れる、火繩をつける間合もない佐助は多勢を十造に任せておいて、ソツと陣屋へ取つてかへし、大將正秀の居間の戸板へさして

大砲を取られてアツと菅沼が

青くなつたり赤くなつたり

真田郎黨 猿飛 佐助

寛 十造

かう書いておいて、口中に何か稱へますると、忽ち陣屋は一面の火となつた、猿「ヤ、ツ、火事だ／＼、大變／＼……」佐助は大聲揚げて觸れて廻る、大將正秀とヨイと見ると、陣屋が焼けてをりますから、正「オヤツ、出火だ／＼、消せよ／＼」大砲も取り返さねばならず、火も消さねばならぬ、二手に分れて大騒動となりましたその暇に佐助は、十造を促がし立て、大砲擔いでドシ／＼その場を立ちのき、なんなく出丸へ戻つて来ました、跡に菅沼の陣屋は大騒ぎをやつて居たが、不意に火がバツと消へた、正「ヤツ、こりやごうじや、ごこも焼けてはゐない、正面の板戸を見ることなにか書いてある、菅沼正秀讀んで見て、正「ウーム、残念、サテは真田の忍術使ひの所業よな……」ブン／＼怒つて青くなつたり赤くなつたりして居ります、幸村は首尾よく大砲を奪ひとり、これで幾分か腹癒せは出来たが、講和となつては大變である

からたゞちに城内へ乗りこみ、反對の議論を述べました、幸「イヤ、此度の講和は甚はだもつてその意を得ぬ次第、これはかならず、大御所の深き企みがございます、某し天文によりまた問者を入れて探らせしところ、かやうくでござる、なにこそ御同意なきやうねがひたい」と、申し込みました、ところが秀頼公も若年でござりますが、今更講和をするの考がへはない、不承知でございます、秀「幸村、予も不同意である、母上今回の講和は断然拒絶するが宜しからうと考がへまかる……」何日もないキツバリといひ放ちました、豪傑連中は大喜び、それに引かへ、臆病者の大野一派は、飽まで淀君と同意見であるから、正式に評定を開き、こゝで決定することにしました、幸村は軍師だから第一に意見を吐かねばなりません、例に依つて、幸「今回の和談申しこみは、如何にもその意を得ませぬ、といふのは他ではござらぬ、かやうくの深き計畧がござる、遅かれ早かれ、再び關東より攻めかゝるに相違ござらぬ、拒絶あつて然るべし……」と、

述べた、後藤又兵衛、木村長門守もこれに賛成いたしました、ところが淀君は、

淀「アイヤ、軍師の言葉なれど妹に對して己に承知の旨を返答したれば、もはや致し方もあるまい、大野治長も承知の上のことである、幸「これは怪しからん仰せ、我々に一應の御相談もなく、大野如きにお計りになつて、御承知とはその意を得ませぬ、察するところ臆病者の大野が御母公にお勧め申したことを、心得ます、大体彼等は職の掛引を知つた人間ではござらぬ、大阪城内には不必要の人物でござる……」と、思ひ切つて大野を悪くいひました、今まで幸村こんなに怒つたことがござりません、スルト秀頼公も怒つて。

秀「ヤア、大野治長、母上に由なきことを勧めたのは汝であらう、子を捨て置いて講和を許るとは何ごとだ、不埒者奴ツ」突つ立ち上つたと思ふと、小姓のもつた太刀取るよりはやく、ズラリ引き抜き、大野治長に斬りつけやうといたされました、スルト渡邊内藏助、こいつ豪傑組ではございますが、大野とは至つて懇意の間柄、この内藏助が飛びだし秀頼を抱きとめ、内「ママづ、わが君、御短氣でござる、しばらく……」引とめて無理矢理奥へ連れ込みました、幸村等の連中は、席を蹴つて立ち去り

ました、こんなゴタ／＼の間にどう／＼講和は成り立つてしまひました。豪傑連中は不平でたまりません、幸村は萬事休すといつた風に、出丸に引こんで出てきません、然しひそかに猿飛佐助に命じて、茶臼山の本陣を窺はせてをりました、スルト講和がなり立つたについて、徳川方は大喜こび、ヤレ／＼と安堵の思ひ幸村これを見て、いかにも残念でたまらない、翌日になると幸村は、眞田關東の狸爺を撃ち取るはこのときだ……』と、

おもつたから、城内へ出かけ、秀頼、淀君にむかつて、眞田今夜某し手の者十人を従がへ、家康の本陣を襲ふて兩將軍の首級を獲つてお目につけておかせう……』と、願ひ出ました、ところが秀頼は異議がなかつたが、例によつて戦ひにはコリ／＼してゐる淀君は、淀折角軍師の言葉であるが一旦講談を取り行つたにもかゝはらず、左様のことをすれば、大阪は偽はりをいふと、世間に信用を失なうであらう、眞田イヤ、それはお考がへちがひ、ソモ／＼戦ひは元來が詐偽でござる、大御所今回の和談もすでに偽はりではござらぬか、相手が偽はりをもつて臨む以上、こつちが詐はりをやるに

なんの不都合がござる、人間は、それほどお心よしではトテも駄目でござる、敵に欺むかれて目出度く納まつてをらるゝは、その氣が知れ申さん、某しがつた言は、他日なるほど、思はるゝでござらう、後悔先に立たず、臍を噛んでも及ばない時節が今にまいるでござらう』と、極言して引下りました。

三七 幸村主従の防止甲斐なく遂に和談成立つ

眞田幸村はじめ豪傑勇士にとつては千載の遺憾でございました、遂に講和は成立ちました、その講和の條件がまた面白い、豊臣方からは、

諸浪人に一切關係せぬ事
藏入を増し、永久に隔意なき事

かういふのだ、また徳川方においては、

折角老將軍家康が大軍を引率してきたからには、天下に對しての面目もあるこ

とだから、外壕の石垣を少々、當方より破却する事

といふのでございました、慶長十九年十二月二十日、徳川方よりは板倉重昌、阿部正次が大阪城中へ正式にのりこみ、盟約書を取つてかへつた、そこで大阪方からも誰か和談盟約書受取りのものを出さねばならぬ、誰にしやうといろ／＼相談の後、いよ／＼本年二十一才の美男子、木村長門守重成を差し立つることになつた、そこで木村長門守は、鎧もつけないで、鬘斗目麻上下で、馬上ゆたかに出立つた、副使としては郡主馬介良隆、その他数人の供をつれて、關東の本陣茶臼山へむかつた、若年の木村長門守が具足もつけぬ上下姿で乗り込んだから、徳川方はおどろいた、そこで重成家康の面前に行つて、首尾よくその盟約書に血判させて、悠然と歸城いたしました、随分このことは有名なもので、長門守の血判取りといつて、殺氣のある話でございます、或ひは重成は、これを破つてふたゞび、この和談を滅茶／＼にしてしまはうといふ考がへで、憤然として家康に無禮の言を吐いたり、あるひは胸に九寸五分を呑んでゐたとか、いろ／＼の説が傳へられてゐるが、元よりこれは針ほどのことを棒ほど

にいつて、面白く仕組だものでございませうが長門守が茶臼山へ行くといふ前夜、幸村は特に長門守を招き何かしきりに密談をいたしましたその上幸村はひそかに猿飛佐助に命じて、木村長門守を守護させました、これだけ仕組んだのであつたが、老獺なる家康は、巧くうけ流したため、重成も相手なしの喧嘩はできぬ、殘念ながらことなぐ濟んだので、まづ兩方は調定いたしました、心なき人の口からは天下太平を稱へられた、家康は京へ引あげました、跡には本多上野介正純に命じて、約束の大阪城外壕の破却總奉行とした、最初は家康が出陣したといふ申し譯ぐらひにいつて淀君と大野一派を承知させた、外壕の石垣二つ三つの破却といふのが遣り出すとナカ／＼そんなことではございませぬ、これがソモ／＼家康の大目的であつて、家家はこの難攻不落の大阪城の容易に落ちないことを知りましたから、その羽翼をそぎ、大阪城を裸体にして、蟹の爪をそいだやうにして置いて、十分勝てるといふ見込みを立て、ふたゞび攻めかゝるつもりなのでございませぬ家康が大阪城の外壕を埋めたら落城するといふことを知つてゐるかといふに、その昔し家康が太閤殿下に従がつてゐたときに、

肥前名護屋在陣中のことであつた、太閤は大阪城の繪圖面を開いて、側に居る家康にむかひ。

太「内府は、この城をどうしたらおちると思ふ」と、たづねた、家康はしばらく考がへたが、どうも分らぬ、徳「手前では頼ごわかりませぬ、殿下の御説を承まはりたい……」と、いつた、太閤はかねて織田信長公が、本願寺門跡をこの土地に攻めて、十年以上も拔けなかつた経験があるから、莞爾として、太「内府、この城を落すには、一まづ講和を申し入れて、外壕を埋めてしまつたら、二日のうちに落城する」と、何氣なくいつた、秀吉ほどの大將も、後年わが子孫がこの家康のために亡ぼされることは知りませんから、平氣でいつたのだが、家康はナカ／＼平氣で聞いてはをりません、これをおもひ出して今回一旦講和を申し入れ、外壕さへ埋めさせたら、もうこつちのものだといふ氣なのでございます、夫れであるから、外壕の石垣二つ三つなどは詐はりで、一萬石以上の諸大名より、五六十人の人夫を出させ、夜を日について壕を埋めはじめました、そのうちに家康より上野介に内命があつて、外壕はいふまでもなく、

二の丸三の丸も破壊せよといふことだ、委細承知といふので、上野介はますます人夫を督して、外壕を埋め、それが済むと、今度は内壕に取りかゝつた、はじめて城中の人々は驚ろき、△「これは怪しからん、約束が違ふ……」治長も狼狽して、阿玉の局をもつて、本多上野介に談判させました、ところが正純なんて左様なことを聞くもりか、正「拙者は、大御所の命によつて破壊するばかりだ」と、いつて聞かぬ、そこでたゞちに城内では、淀君と大野が相談して阿玉の局を京都へやつて、成瀬隼人正正成にこのことを訴たへさせました、スルト正成は、正「それは、拙者の役目ではない」と、いつて跳ねつけた、詮方なしに阿玉の局、今度は佐渡守正信に訴たへた、ところが正信は病氣だといつて面會しません、あつちへ行きこつちへ行く、そのうちに晝夜兼行、工事を急いで内壕も外壕もこごとく埋めてしまひました、大阪城はもう丸裸体、たゞ單に牙城をこめたばかりにせられてしまつた、淀君大野等ははじめて後悔したが追附かない、幸村等はそれみたことかと冷笑つてをります、眞「アハ……、今更夢が覺めたところでなんの役に立つものでない、あのときこの幸

村は、すでに今日あるを承知してゐたから、懇々申しあげてある、今はこの幸村とて
もどうすることもできない、空嘯ぶいてをります、大野は泣きつく、十勇士はさん
ん悪くいふ、流石の治長も、はじめて夢が覺めたとみへ、残念／＼と地団太踏んでを
りました、ところが真田幸村のゐる真田丸も約束によつて、破壊せんければならぬ、
イヤ約束は別にないのだが、和談になつた今日、出丸を築いてゐるのは穩かならぬか
らこれも理屈からいふと、破壊するのが本當でございます、それゆゑ幸村は破壊する
考がへでゐたから、本多正信へ向けて。

真田出丸は拙者の手で破壊するから御心配におよばぬ」と、申してやりました、そこ
ろが上野介はごうしても聞入れませぬ、幸村大いに怒つて、真田大體、上野介は自分
の主人に忠義さへ盡せば、人に對しては無禮をいたしても差支へない考がへであるが
一體この砦を築くには、父安房守昌幸より傳授の曲尺をもつて、心を込めて作つたも
のだ、故に關東の大軍を引き受けて、怯ごもしないのは、全く要害堅固の故である
その秘法を人に見せるが否さに、當方で破壊するといふは、これ武門の禮をおもつた

からだ、ヨシヤ貴殿が虎の威をかり、徳川を笠にきて、無理にこの廓を破壊しやうと
して兩軍の和談がこゝに破れても差支へない、イヤ破れる方がこつちは幸福だ、貴殿
は武門の禮儀をなんとおもはるゝ、美事破壊するなら遣つて御覽あれと、いひ送りま
した、スルト本多上野介も負けず嫌ひの男でございますから、ソレごいふので、意地
になつて、出丸の破壊にかゝりました、ところが例の猿飛佐助、猿面白、一番苛
めてやらう……」

櫓の上で九字を切り印を結ぶと、ドン／＼と縦りこんできた人足ども、今や破壊にか
ゝらうとするに、にわかにはゴーツと大風が吹き起り、砂を捲きあげ、目や口へ入る、
目を開けてゐることができぬ、△「ウワー、大變／＼、恐ろしい暴風雨になつた」ワ
ア／＼騒ぐ、ところへ十勇士の暴れ好き、三好清海入道や寛十造、由利鎌之助、穴山
小助等がドツと飛び出し、人足どもを引つ捕へて、ボカ／＼殴る、とつて投るといふ
騒ぎ、グズ／＼して居ると命が危ふいから、上野介青くなつて引揚げました、スルト
大風はビタリとやむ、また翌日人足を澤山増して出かける、破壊にかゝると、佐助が

九字を切る、今度はザア〜大雨が降り出した、雨かとおもふと、石が交つて降る頭へボカ〜降りかゝる、△「アイタ……、恐ろしい雨だ、イヤ雨じやアない、石が降るのだ……仕事どころの騒ぎではない」人足ごもはわれ一にと逃げ出す、上野介大いに驚ろき、馬上で喧ましく叱呵してゐると、十勇士の三好、寛がバラリとんで来て、上野介の馬の前足引つかけ、寛は後足掴んで、三「サア、擔げ〜エツシヨイ〜、ヤイ上野介まご〜するご捻り潰すぞ……」ドンと投げ出す、こんな亂暴者にかゝつては上野介もたまりません、上「ウーム、残念〜……、三「喧ましくいふと、噛んで喰つてしまふぞ……」

上野介這々の体で逃げ出す、その後は懲りたと見せ、出て来なくなつた、幸村は折角精神こめて築いた出丸も、つひに破壊せんければならなくなり、こんなゴタ〜のうち大阪城はズンペラポウの一本立ちとなりました、それと同時に、金が乏しくなつてきて、大阪城内は配としてゐられなくなつた、それは前にもいつた通り、すでに大佛供養のときに、もう借金をせねばならぬといふ大阪方であつたので、それにこの

度合戦をして、さらにまた講和となつたので、城内に十萬からゐる人間を養なう兵糧が第一乏しい、さうかといつてそのまゝ、何もしないで遊んでゐるばかりでは、餓死するより外に仕方がございませぬ、それゆゑ多くの浪人中には切取強盜武士の習ひといふ無茶な理屈をつけて、ポツ〜城内へ出て人民を苦しめるものもある、中には大阪浪人だといつて、僞者も大分徘徊する、こんな風で金がなくて遊んでゐるのだからどうしてふたゝび戦ひでもしなければならなくなりました、丁度大御所家康が、おもふ儘にはまつて、金をとりあげ、堀をうづめ、あらゆる迫害を加へておいて、困つた揚句に亡ぼさうといふ計略がスツカリ當つた、たゞ家康にこんな魂膽があるといふことを知つてゐるのは幸村はじめ二三の人間ばかりでございました、淀君大野等の臆病者は、今さら後悔して、臍を咬んでも及ばなくなつてきた、そこで治長は上野介が属をすつかりうづめて立ちさると、秀頼公には城内が日々困るやうになつてくから、青木民部および大藏の局、二位の局を駿府へくだし、秀「家人に賜はるべき知行の地がござらぬ、このこと御沙汰相成るやう」と、願ひ出でました、スルト家康、

家「大和郡山に移れ、知行のことはまたいかやうとも相談しやう」と、返事した、
れでもう手切れになつたも同様でございます、イヨ／＼これより大阪の夏陣と相なり
猿飛佐助は御大將幸村に従がつて、ますます大功を立てました、さしも勢ひよかつた
大阪方も、時運の然らしむるところでございますか、元和元年五月七日の早天、落
城の悲運に陥りました、然し流石は一世の大軍師、表面は秀頼公以下一同討死に見せ
かけて、豫ねて約束してある島津の兵船へ乗じて、一先づ九州薩摩へ落ち行きます
といふお物語りに移りますが、最早や紙敷の制限にございますれば、本編は此の邊
で一先切上、又他日講演出版することゝ致しまする……永々御退屈さま……。

眞田猿飛佐助 (終)

大正六年六月二十日印刷
大正六年六月廿五日發行

【定價金參拾錢】

著作
所有

著作者 玉田玉秀齋講演

大阪市東區博愛町四丁目十三番地

發行者 立川熊次郎

大阪市東區博愛町一丁目一番地

印刷者 宮野孝恩

大阪市東區博愛町四丁目十三番地

發行元

立川文明堂

電話 南三〇九四番
振替大阪一四六一番

219
94

終

